

特集 ICTの効果的な活用

iPadを活用し
英語科の授業に協働教育を

大西久雄

(埼玉県越谷市立大袋中学校)

1. ツールとしてのiPadを使う意義と前提

本校では、英語の授業に限らず様々な教科でiPadを活用している。その使い方、教材は教科で異なるが、共通している約束事がある。1つは、班や複数で1台使用すること(これはiPadを提供いただいている近隣大学からの台数制限があることも大きな理由)。そしてもう1つは、iPadに入れる教材はドリル的なものよりも、考えたり発表したりするものを重視することである。本校がiPadを積極的に活用している上で存在するこの2つの暗黙の前提は、「生徒の相互啓発活動」を重視するためである。



昨今のICTを教育現場に導入することに反対する論陣の多くは、デジタル教育が生徒間のコミュニケーションを阻害することを危惧している。デジタルを使った教育は自己完結してしまうと信じ、学びのダイナミズムが損なわれる、とまで言われている。彼らの心配の向きもわからないでもないが、ICTの使い方次第である。「使うことがメインではなく、あくまでツールとして使うことを大前提とし、使う意義を明確にすることで効果的な授業が創造できる」と本校では前向きに考え、使用を奨励している。

では、「生徒の相互啓発活動」を重視するとはどういうことなのか。デジタル教材は凝ろうと思えばとことん作り込めるものである。そして個人の手元で何回も再生でき、わかるまで見続けることもできる。

これが、反対派の危惧する自己完結の典型であろう。

本校の教材は、簡単でかつシンプルなものが多い。特に英語授業においては、写真や絵、簡単な英単語等である。生徒たちは班、あるいは2,3人のグループで、iPadを使ってこれらを見合い、互いに考え、互いの思いをぶつける場を創っている。これを生徒間の相互啓発と呼び、iPadを提供いただいている近隣大学との共同研究のテーマにもしている。

デジタル機器、特に手元で簡単に操作ができ、再生やプレゼンにも適するiPadを、言語活動の充実に資する目的で使用する、そんな英語授業での実践事例を3つ紹介したい。

2. 【実践事例①】 固定観念を破るー「世界の朝食」で発見や驚きをまとめ、発表する

最初に3年生の事例を紹介する。生徒は自分たちの毎朝食べている食事に疑問を持つことは少ない。と同時に、世界でも同じようなものを食べていると思いがちであり、まさしく固定観念に囚われている。担当の高橋教諭は、世界の国々ではどんな朝食が摂られているのか、そこから得られる発見や驚きで生徒の相互啓発の場を創ろうと設定した。Web等から世界44カ国の朝食の写真をiPadに入れ、各班1台使用し、それらを生徒たちは見合って、興味を覚えたもの、食べてみたいものを生徒間で話し合い、それを英語で発表するのである。

まず、教師が大型テレビにiPadの画像を提示し、手本を示す。3年生なので、既習事項はできるだけ使用することを条



件に、自分たちの班のおすすめ朝食はこれと映像を提示し、どこがお気に入りかの理由を示し、5文程度の英語にまとめプレゼンを行う。

これも素材は単純で、44枚の写真がiPadにあるだけである。それをもとに生徒たちは話し合いを重ね、英文を練り上げていき、そして発表文章を作成する。iPadを手に掲げてプレゼンする際には、原稿を見ることができないため、生徒は英文を覚え、写真を示し、聴衆を意識しての発表ができるのである。



3. 【実践事例②】 思いを馳せるー「そのときの気分は」推測や慮りで考えをまとめ、発表する

次に2年生の事例を紹介する。iPadに23枚の写真を入れておく。これらの写真には、喜怒哀楽を示す芸能人、アニメキャラクター、スポーツ選手等の顔が写っている。これを使い、“This is ○○○. He (She) looks happy (sad, angry, etc.).”と紹介し、その後理由を述べるように設定した。各班(4人設定)でiPad1台を使用し、どの写真で、どんな感情を表現するかを班で決め、英文にまとめる。

担当の瀬尾教諭は自らALTと共にデモを行い、生徒に範例を示した後、ALTと生徒のサポートにまわる。理由の部分では、班で知恵を出し合い、教師やALTに相談するのも、班での戦略である。そして、難しい表現をいかに引き出すかは、生徒相互啓発の成果である。

ワークシートを活用し、生徒たちは写真から気分を慮り、写真の主人公に思いを馳せて発表する場を設定するのに、iPadは便利で有益なツールである。



4. 【実践事例③】 自らの思いを語るー「私の尊敬する人は」素材を選び、思いをまとめ、発表する

最後に3年生の総まとめとしての事例を紹介する。「私の尊敬する人、生き方に影響を与えた人」というテーマで教科書に出ている文を参考にして、オリジナルのスピーチを作成し、発表する。

発表までは、3つのステップを踏む。ステップ1では人の紹介・出会いを“I’m going to talk about ○○.”でスタートさせ、ステップ2ではその人についての人生や業績を具体的に、“He never gave up on life.”のように自分が感銘を受けたりしたことを紹介、ステップ3ではその人から学んだこと、これからそれを参考にやってみようことなどを専用シートに英文にまとめる。この原稿作成と共に、パソコンルームでその自分や作品、業績がわかる画像を自分で収集する。それをiPadに入れ、自らのスピーチのツールとして活用する。

各班のiPadには、班員全員(4名)の画像が入っているので、生徒たちは班の中で順番にそれを使い、スピーチ練習を繰り返す。これにより生徒間の相互啓発になり、互いのスピーチを聞き、質問し、感想を述べ合い、アドバイスを交わす。この練習を繰り返した後、iPadを大型テレビに繋げて、クラス全体の前で、生徒一人ひとりがスピーチする。指導した小林教諭やALT、生徒から質問が飛ぶこともあり、生徒は一生懸命に英語で答える。



5. まとめ

文部科学省が示す「教え合い、学び合う学習」ー協働教育は、ICTを活用することで、英語授業が活性化していく。

【参考文献】
 文部科学省(2011.4.8).「教育の情報化のビジョン」.
 今田晃一・大西久雄・村山大樹(2010).「タブレット型情報端末機(iPad)を用いた授業づくりの可能性」文教大学教育研究科ジャーナルVol.3, No.1, pp11-12.
 田原総一郎(2010).『デジタル教育が日本を減ぼす』ポプラ社.